

身体と貨幣

鮎 川 真由美

序

身体と貨幣。この一見、絡み難い主題どうしが、現在の資本主義経済社会のなかでいかに絡みあい、複雑な様相を呈しているか。このことを論じてゆくのが本稿の課題である。言い換えると、美学的（感性論的）次元と経済学的次元との絡みあいを、身体、貨幣、自然、芸術（技術）といった概念どうしの交差のなかで読み解いてゆくという試みである。

たとえば、西洋思想の文脈のなかで「貨幣形態」についてふり返ってみると、それは古代ギリシャにおいては、戦争に負けた国から勝った国へと自ら歩いて移動する奴隷、という人の形をとった貨幣であったこともあったし、中世には、実質的な物質的価値を担った重い金貨が交換経済を担ったこともあった。それがさらに、言ってみれば一枚の紙にすぎない紙幣へ、そして最後には、現在みられるような電子マネーへと脱物質してゆく⁽¹⁾。ここで明らかなのは、たとえば、貨幣という「見える」物質性と「見えない」価値をになった事物が、最終的には0／1のデジタル電子記号の流れ（currency）へと、言い換えるならば、目に見えるモノから見えないモノへと変遷してきている貨幣形態の歴史的過程である⁽²⁾。

他方で、西洋近代芸術の歴史的な流れをふり返るならば、たとえば、「これは芸術作品である」という命名行為により、複製可能な「レディメイド」が、あたかも錬金術的な仕方で芸術作品へと変貌する二〇世紀以後の芸術状況をうかがい知ることができよう。それは、「見える」複製的工業製品が、何か特別な「見えない」価値を帯びてでもいるかのごとくである。

ところで、考えてみれば至極当然のことだが、自然物としての「身体」と人工物としての「貨幣」、である。しかしながら、身体とは「自然」ではあるが、「人為」的なモノでもあることは、生活世界のなかで、たとえば人為的な延命治療をとって

みても明らかであろう。また他方で、人間の「頭の」かつ「手の」産物である貨幣。だが貨幣は、人間社会において流通することによって、もはや人間の手を超えて自ら運動する力（自然）へと変貌するモノともいえよう。それゆえ、身体と貨幣、この両者をもはや、たんに自然（Natur）／人為（Kunst）と二分して考えるのは妥当ではなかろう。自然的であり、かつ人為的・技術的な媒体である両者が、現在の資本主義経済社会のとりわけ美学・芸術の領域においていかに絡みあっているか、ということをするとしても論理的に明らかにできればと思う。

さて、アリストテレスにならえば、運動と停止の原理をそれ自身の内にもつ、存在するものとしての自然（Natur）と、それ以外の、存在するものとしての技術（Kunst）⁽³⁾である。そうした自然としての身体は、また、どこまでも見える物質であり、人工物としての貨幣は、見えない物質へと、いわば「脱身体化」している幽霊のようなモノと、二十一世紀の今現在、言うこともできよう。さらにまた、強調するまでもなく、身体と貨幣の両者はともに、人類の歴史が始まって以来、いかに人間の欲望を掻きたてる対象として、あるいは逆に、禁欲の対象として存在してきたことか。とりわけ、近代の資本主義時代における両者の本源的な絡みあいの一端を、多少なりとも明らかにすることが本稿の課題である。

1 貨幣と芸術

「芸術とは商品（すなわち貨幣）である」⁽⁴⁾と述べるボリス・グロイスなど、現代の芸術批評家にしばしばみられるこのテーゼより遥か以前、つまり、古来よりすでに貨幣こそが、ある意味では芸術作品であった。それはまた美術史においても、すでに破壊されて文学のなかでのみ知られる作品や、古代の、失われた神々のイメージについて、重要な手がかりを与えてくれるのは貨幣であった⁽⁵⁾。貨幣そのものの起源については、イギリスの経済学者ケインズが、「本来の貨幣の起源は、歴史家によって多くの場合、最初の鑄造と結びつけられているが、その貨幣の鑄造については紀元前6、7世紀にリディアでそれが始まったというヘロドトスの記述は、いまでもなお信用してよいだろう」と述べている⁽⁶⁾。国家的な権力誇示などのイメージの表象や流通手段として、貨幣は機能してきたとはいえ、重要なのは、

近代に特徴的な「代表貨幣 (representative money)」(紙幣はその典型である) としての機能であろう。貨幣は、その物的素材の固有の価値が、その貨幣的額面価値から分離してゆく歴史的歩みをたどってきたのである。ソシユールのな言語記号論でいうところの、シニフィアンとシニフィエの「恣意的結合」が、とりわけ近代の貨幣の形姿において生じているともいえる。

では、このような資本主義という交換経済システムの発達した近代において、「芸術 (技術)」はどのように捉えることができるだろうか。

たとえば、ドイツのメディア理論家ペーター・ヴァイベルは、「芸術の再技術化 (Retechnisierung)」という点を主張している。芸術とは第一に、技術 (Technik) のひとつ事柄であり要件であったが、マレーヴィッチの黒い正方形やデュシャンのレディメイドなどは「芸術の脱技術化 (Enttechnisierung)」というひとつの時代を導いたのである。二〇世紀の芸術のアヴァンギャルドが試みたのは、「芸術 (Kunst)」をまず、その語源とも結びついた「技術 (Technik)」から解放することだった⁽⁷⁾。

このような近代の技術的世界は、合理的、分析的、演繹的な世界認識の方法に基づいている。物理学のような自然科学や数学のような形式科学が近代のテクノロジーの基礎を作り、またそれらの科学は、デカルトをもちだすまでもなく哲学に依存している。つまり、哲学が私たちの文化の不可視の部分を構築している限りにおいて (もしかすると、このような主張は西洋哲学の伝統のある欧米社会に限定せねばならないのかもしれないが)、「近代の技術 (芸術) は、近代の自然科学と同様に、哲学的理論の優位に依存している」とヴァイベルは述べる⁽⁸⁾。

こうした芸術における哲学的理論の優位を、より公平な視点から解放してやること、さらに言うならば、「こうした近代の呪縛から芸術を解放すること」という流れが二〇世紀に生じてくるのも歴史の必然であっただろう。だがさらに、二十一世紀には、身体の技術化も含めた、再技術化へと向かっている、というのである⁽⁹⁾。

ところで、近代の十八世紀、カントはその『判断力批判』(一七九〇年) 第四五節において、次のように述べている。「美しき芸術とは、ひとつの技術である。それが自然のように思われる限りにおいて。美しき技術の産物において人が意識的にならざるを得ないのは、それが、芸術であり自然ではない、ということである」

と。また「自然が美しいのは、それは芸術としてみえる場合であるし、芸術が、美しいと言われるのは、それが技術であると我々に意識されながらも、自然のようにみえる場合である」。

自然と芸術（あるいは技術）、ひいては自然物と人工物のあいだに美を規定したカントであるが、そこからさらに二世紀以上を経た現在、こうした自然物と人工物とのあいだのアナロジーは、たとえば「有機体と機械のあいだのアナロジー」、つまりサイバネティクスの理論に対応するともいえよう。自然と技術のアナロジーであるサイバネティクスとは、まさに「自然と技術というパラドクシカルな結合の起源」⁽¹⁰⁾なのである。そしてまた、自然としての身体も同様にパラドクシカルな存在として捉えることができるのではないだろうか。

2 身体という「商品の魂」

こうしたなかで、いま再び、芸術における「身体」の問題を考えると、それはつねに多くの問題を孕む。つまり「肉体的性（Leiblichkeit）」とは決して近代の新しいテーマではないがゆえにである。これはまさに哲学史的な伝統そのものともいえる。にもかかわらず、いわゆる「身心問題（Leib-Seele-Problem）」が議論の俎上にのぼるときにはつねに、今日に至るまで、「アクチュアル」な問題を呈する。身体とは、思考可能な秩序をもったものか、それともたんに体験や感覚の表現として把握されるものなのだろうか、と。

古来、「見えない」ものの代表格であるといえる「魂（Seele）」という言葉は、ホメロスにおいては、生きた人間に対して適用されるものではなかった。魂についてホメロスが述べているのは、それが死に際して、人間を置き去りにし、また戦いにおいて人がそれ（魂）を投入したり、また喪失したりすることもある、あるいはそれ（魂）の救済を試みたりというような状況である。また魂は、とりわけ「呼吸」と関わっており、口や傷口を通して、死にゆくものを置き去りにする「生の息吹」としてホメロスにおいては描かれているのである⁽¹¹⁾。「魂とは、有機体の生命原理なのだ」⁽¹²⁾と述べるアリストテレス以前にも、それは哲学者らの豊かなイメージの宝庫であったといえる。

さて、「マトリクス」という母型や子宮を意味する語があるが、その語源にさかのばれば、母を、とりわけ孕んだ母を指し、とりわけ世界の生成の説明のセクシュアルなモデルとしてしばしば用いられている。こうした「母型」を、快楽の等価物として、交換価値をになった「商品」としての身体へと、解釈をすすめたのがフランクフルト学派の批評家、ヴァルター・ベンヤミンである。ベンヤミンは、孕み、増殖するものとしての身体に刻印された、近代の資本主義社会の徴をそこに認めるのである⁽¹³⁾。

十九世紀のパリという大都市の高級娼婦は、印象派の画家エドゥアール・マネによっても「オランピア」（一八六三年）において描かれている。ここで、オランピアの身体は、いわば、商品あるいは貨幣としての身体である。娼婦は、見られるものとしての裸体が、受容者を見返す構図において描かれており、典型的な、見る男性／見られる女性、買う男性／買われる女性という能動と受動の関係性を、まさに裸体の娼婦が「見る」眼差しによって反転させるという、スキャンダルが、まさに近代絵画の理念を表現しているものでもある。俗なる対象、貨幣＝身体というモノが、まさに聖なるものであるかのごとく。

商品とは「異質」な事物を、「同一」のモノとする仮象の世界を生み出す。本来異質なものに、「無関心」的に同質性を感じとる感覚、つまり、大量生産時代という近代の固有のこの無関心性こそが、物象化された物体に宿っている「商品の魂」（マルクス）なのである。

3 神＝貨幣？

ノルベルト・ボルツは、「神の語としての貨幣－いかに貨幣が神に代わり、文化を支え、問題を解決するか」⁽¹⁴⁾という論考において「神学的発明としての資本主義」という観点から考察している。

ところで、マックス・ヴェーバーは「資本主義の精神」について有名なテーゼを提起した社会学者であるが、その核とは、プロテスタンティズムの禁欲的な形式が、日常的な生の方法論を生みだし、人々の日常的な生までも規定したということであった。だが、さらに述べれば、ヴェーバーの核心とは－私見ではあるが－禁

欲と非禁欲の矛盾構造がそもそもプロテスタンティズムのなかにあり、そうした矛盾こそが、矛盾を内包することによって発展している資本主義構造と合致した、という点にあるのではないかと考えられる。ボルツの見解では、資本主義は、キリスト教のパラサイトとして生じた。そして資本主義は、その諸々の力によって、最終的にはキリスト教との同一性の関係へ巻き込まれてゆくという。

キリスト教の近代史とは、資本主義の近代史なのである。そして、前述のベンヤミンは、資本主義を、さらにキリスト教のパラサイトの「身体化」として把握していると把握するボルツは、前述の論考において次のように考えている。

近代の世界では、貨幣とは、神に対する機能的な等価物であり、神のテクニカルな代替物である。それゆえ、貨幣は「神の語」として理解されるのであり、「世俗化」として理解されるべきものではない。今日、世界の確実性を保証するのは、神ではなく貨幣であると。

近代の世界の諸問題が解決可能なのは、そうした諸問題にいかに関わることが貨幣形態を貸与しうるのに成功するかにかかっているとはいえ、貨幣とは、なにか「魔術的実体」のようなものでもない。「脱魔術化」された合理的な近代という、かのヴェーバーのテーゼに対して、ボルツは貨幣を、今や神の地位にあるとはいえ「魔術的」ではないとしている。

すこし具体的に考えてみよう。媒体としての貨幣の合理性および非合理性とは、とりわけ、異なる財やサービスのあいだで「等価」を組織することにある。たとえば、セーターや本はそれぞれ異質の事物であるのに、いずれも一万円という代金がつけられて等しく商品として交換されるのである。「等価 (äquivalent)」とは、「同一 (identisch)」なのではなく、全く同等でないにもかかわらず、同じ価値をもつものとされることである。貨幣媒介的な等価交換に応じる者は、それゆえにというべきか、交換物の「非同一性」に「無関心」なのだ。つまり等価 (Äquivalenz) が等価値 (Gleichwertigkeit) を引きおこし、それは、無関心 (Gleichgültigkeit) を伴うものなのである⁽¹⁵⁾。こうした近代社会の現象に、かの「オランピア」がそうであったように、現代芸術における「身体」は、つねにアクチュアルな問題を私たちに突きつけてくる。

結語

Conversion という語がある。この語は、まさに文脈に依存する語である。というのも、これは少なくとも三つの異なった領域において用いられるのであるから。それは、宗教と情報と経済という分野においてである。それぞれ、宗教的な「改宗」という意味で、あるいはパソコンのディスクが異なる機種間で「変換」できるか、という場合に、あるいは貨幣の「兌換」というように、用いられる。この、宗教的、メディアテクノロジー的、貨幣的な conversion の概念が各々用いられているのみならず、そこには、共通した問題領域も存在するようにみえる。それは、異なった秩序のあいだの交換、まさに「他なるものに成ること」と言いかえてもよいだろう。キリスト教の世界においては「貨幣」とは「聖餐のパン」を相続したものであり、近代における「神の語」と成りゆくものなのであろうか。

「身体」と「貨幣」とは、以上のように、近代資本主義社会における錯綜した convert の様相を、如実に指し示す対概念なのではないだろうか。

注

- (1) Vgl. Ulrich von Lübtow, Hans Harlandt und J.M.Keynes: *Die Geschichte vom Geld*. Berlin, 1996.
- (2) Jürgen Harten: *Das fünfte Element-Geld oder Kunst*. Köln, 2000. S.138f.
- (3) Vgl. アリストテレス『自然学』192b13ff.
- (4) Boris Groys: *Topologie der Kunst*. München, 2003. S.9ff.
- (5) 'Numismatik', in: *Lexikon der Kunst*. Band V. Leipzig, 1993. S.231.
- (6) 『ケインズ全集』(第5巻 貨幣論 I)、東洋経済新報社、pp.11-12.
- (7) Boris Groys: *Die Kunst des Denkens*. Hamburg, 2008. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Peter Weibel. S.106.
- (8) Ebd. S.243.
- (9) Ebd. S.255.
- (10) Peter Weibel: *Gamma und Amplitude*. Berlin, 2004. S.431.
- (11) *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.9, hrsg.v. Joachim Ritter und Karlfried

Gründer. Basel, 1995. S.1-89.

(12) アリストテレス 『デ・アニマ』 II,2f.

(13) Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften*, II.S.613.

(14) Norbert Bolz: Money as God-Term. Wie das Geld Gott ersetzt, Kultur stiftet und Probleme löst, in: *Gott, Geld und Gabe. Zur Geldförmigkeit des Denkens in Religion und Gesellschaft*, hrsg. von Christof Gestrich, Berlin, 2004. S.88-102.

(15) Vgl. Jochen Hörisch: Äquivalenzen, Gleichgültigkeiten, Ringe. Das Geld der Literatur, in: *Merkur*, Nr.563, 1996. S.127-137.